



全難聴便り

発行：事務局 〒162-0066
東京都新宿区市谷台町14-5 MSビル市ヶ谷台1F
編集：全難聴事務局
電話：03(3225)5600
FAX：03(3354)0046
URL：<http://www.zennancho.or.jp>
E-Mail：zennacho@zennancho.or.jp

↑ 第20回全国福祉大会 in 三重 (10月25～27日)



大会アトラクション「伊賀忍者ダンス集団・忍ノ輝」

20年に一度行なわれる「伊勢神宮式年遷宮」(2013年)の翌年は、「おかげ年」といって、神様の神通力がMAXになるめでたい年です。そのめでたい2014年に伊勢の国、三重県四日市市で福祉大会が開催されました。

一年で最も安定した気候の中、約500名の参加者が、5つの分科会に集い、難聴についての議論をし、相互理解深め、交流を行いました。「第20回全国中途失聴者・難聴者福祉大会 in 三重」のテーマは、「一人ひとりの思いや願いを大切にできる共生社会の実現を」です。

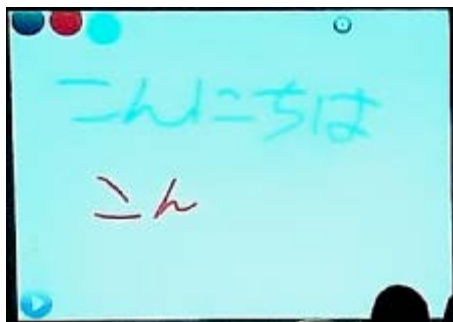
記念講演は、AJU 自立の家専務理事である山田昭義氏による「合理的配慮がなされる社会を目指して」でした。

現在内閣府では、障害者権利条約批准をうけ政策委員会が開かれています。毎回委員が差別解消法について主張している「他の市民との平等」についても、山田氏は強いメッセージを発信しました。「合理的配慮の否定は、差別である」ことの意味を訴えました。

呼応するように、分科会では「難聴女性の差別解消を考える」(第3分科会)の中で、難聴女性への複合差別から生まれる疎外感、自己実現の困難からそれに対処する勇気を生むための活発なディスカッションが行なわれました。

「第2分科会」「要約筆記者派遣事業と厚労省モデル要綱の示す方向」の中で難聴者が社会生活を充実する上での、各地の要約筆記事業への取り組み事例、実情、問題点が議論されました。群馬、香川、愛知からの報告は事業実施に向け各地が模索していると実感させられました。

「聞こえの健康支援センター」構想(第4分科会)を進めている補聴医療対策部は、当事者の体験から求められるQOL向上について専門家の意見を交えて議論をしました。壮大な計画は、参加者の意識の高まりを引き出すことになり、センター構想に関する議論が活発化しています。



大会には NHK のテレビクルーが入り、「第1分科会」「手書き文字通信、音声認識」を中心に取材をしました。分科会では、難聴者と聴者を結ぶ、会話支援機やアプリの実演を交えて活用について考えました。当日の取材の様子は、11月23日(日)「ろうを生きる、難聴を生きる (Eテレ)」にて放送されます。

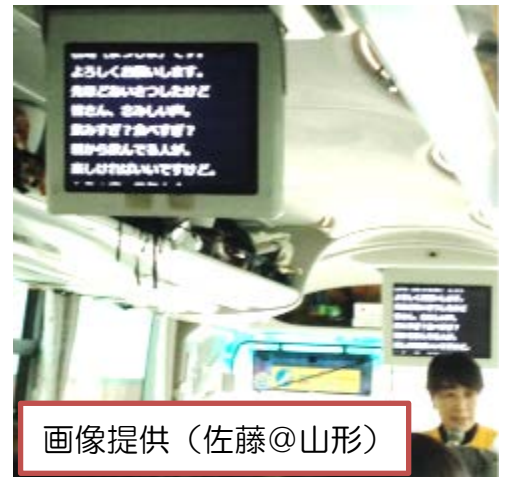
三重県協会が座長となる「まるごと三重を体験しよう」(第5分科会)では、鳥羽、伊勢などでのバリアフリー対応について事例を紹介しながら議論をしました。そして、その実践が行なわれたのが情報保障付きバスツアーです。

チャーターしたバスは、車内に磁気ループが設置され、複数のテレビ画面にはガイドさんの言葉が流れるように表示されました。

バスにはパソコン要約筆記者が同乗し、情報保障を行っていたのです。もちろんバスを降りた後の観光地での対応にもぬかりなく、あらかじめ用意してある文字表示板や、パンダナを配布してグループ分けするなどの配慮をしました。

ハード、ソフトを組み合わせでのバリアフリー観光のモデルケースになったと言えます。

平成27年度の福祉大会は、「うどん県」香川です。
「おいでませ〜」 by 湯浅



画像提供（佐藤@山形）

👉 平成26年度全難聴・全要研東北ブロック大会報告

大会実行委員長 東海林清人

東北ブロック大会が9月27日～28日山形県「かみのやま温泉ニュー村尾」にて東北各県から133名が参加。函館市からも6名の方々をお迎えして、盛大に開催されました。

1日目の研修会テーマは「難聴者としてのコミュニケーション力を高めるために」と題し全難聴前要約筆記部長 藤谷弘晃氏に講演をお願いしました。特に「難聴者は自分に合ったコミュニケーション手段を駆使し、引きこもらず積極的に活動することが大事」との話しに、誰もが自分自身に照らし合わせうなずいていました。巧みな話術に引き込まれ、あっという間の2時間でした。



開会式で挨拶をする工藤ブロック長

懇親会は工藤文紀東北ブロック長の挨拶で始まり、山難聴の宴会部長男女2人によるリズムに乗った進行ぶりに思わず盃も進みました。余興は、全員が輪になって花笠を手に花笠音頭を踊りました。また、〇×クイズで1等賞を当てた函館市の三好様には山形県名産サクランボの贈答目録が、また2等、3等の方々には県産銘酒が贈られました。

二次会の会場はホテル内のスナックに40人程が移動して、カラオケで楽しみました。中には三次会へと流れて行った酒豪の人たちもいました。

2日目の午前中は、

「蔵王のふもとで語ろう、難聴者と要約筆記者の未来に向けて」

くざくばらんに話し合おう、次の一歩のために>

と題して全員が6グループに分かれて意見交換会ワークショップが開催されました。休憩時間も惜しみ、要約筆記に対する思いや聞こえの悩み等を難聴者も要約筆記者も隔てなく話していました。

ご参加くださいました皆様に対し、実行委員一同心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

平成26年10月22日、その日は朝から久しぶりに大粒の雨でした。

午前11時半から開廷です。難聴者協会からは香川の湯浅と愛媛の越智初江さんが出席しました。全日本ろうあ連盟事務局長の久松三二氏、全国手話通訳問題研究会の森川美恵子氏、一般社団法人手話通訳士協会理事の新中理恵子氏の顔が見えます。

開廷一番に、「平成24年 障害者自立支援法に基づく手話通訳派遣却下処分等請求事件」について、裁判所から勧告の言葉がありました。原告池川洋子さんと被告高松市の双方から意見を伺った後、和解条項が読み上げられ和解が成立しました。その間わずか5分間の出来事でした。後で「歴史的な日」と呼ばれることになった瞬間でした。

平成24年2月28日に訴訟を起こしてから終結するまで約2年8か月。それまでに、手話の言語性を認める法（障害者基本法：平成23年8月5日施行）、意思疎通支援の強化を図るための法（障害者総合支援法：平成25年4月1日施行）ができていたこと、さらに今年の1月20日に障害者権利条約が批准されたこともあって、すでに手話通訳派遣問題が解決される素地ができていたのです。

それに、今までの高松市における手話通訳派遣の実態が、ろう者の知る権利を無視するものであったため、必然的に今までの派遣要綱の改正になったと言えます。池川さんの起こした裁判が新要綱の制定を早めたと思います。聞こえない者が提訴するというのはこれまでになく、手話通訳派遣そのものを問題にした裁判も前例がありません。ろう者には手話通訳、難聴者にはパソコン要約筆記と磁気誘導ループ、盲ろう者には椅子を外して指点字など、いろいろな情報保障がなされた裁判も日本では初めてでした。

勝訴に近い和解がなされたことで、池川さんの勇気が多くのろう者に希望を与えたと全日本ろうあ連盟の久松氏が大きな喜びの言葉を述べました。

これまでの手話奉仕員・要約筆記奉仕員派遣事業の実施要綱（高松市地域生活支援事業）を廃止し、意思疎通支援者として手話通訳者・要約筆記者の派遣の範囲を拡大するとともに、派遣区域を市外・県外へと広く認めた新たな要綱に制定されました。国が定めたモデルを採用した内容ですが、全国ではまだまだ広域派遣すら認められていない所もたくさんあります。

高松市が新たな要綱を誠実に運用していくことを約束してくれました。これからどう運用していくかが、私たち一人一人が意識していかなければなりません。

要約筆記者もそうですが、手話通訳者の養成が大変です。平均年齢が50代で、若い通訳者が育ちにくい現実があり、ただ熱意だけでやっているのです。手話通訳の身分保障も大事なのですと挨拶された新中さんの言葉が一番心に残りました。

最後に総数38名の原告弁護団の声明がなされ、香川県聴覚障害者協会の近藤理事長の万歳三唱があり、盛大な拍手の中で3時間以上に及ぶ報告集会が終わりました。

「本日の和解解決の趣旨が、高松市以外の全国の地方自治体に広がるだけでなく、すべての障害者にとって情報利用におけるバリアフリー化を実現する行政措置、立法措置へと実を結びたいことを訴えます」

帰るときに、広島から傍聴に来られた方に声を掛けられました。なんと全難聴が発行した「冬芽を想う」を持っていて、サインを求められて「うわお!!」手話通訳も要約筆記も意思疎通手段としてどちらも大事です、どちらも頑張りますと言ってくださり、私も大変嬉しかったです。多くの要約筆記者が生まれるように、私たち難聴者が声を出していきたいと思います。

⇧ 理事及び専門部長の動き（10/1～10/31）

- 10月1日 韓国聴覚障害者協会事務所訪問（新谷）
- 10月8日 要約筆記者全国統一試験説明会（宇田川部長）
- 10月8日 聴覚障害者中央本部拡大会議（新谷、川場、高木、佐野）
- 10月9日 ユニバーサルデザインフォント会議（小川部長）
- 10月14日 JDF 条約関連報告会（新谷）
- 10月14日 JDF 幹事会（新谷）
- 10月15日 理事長、事務局長会議（新谷、佐野）
- 10月16日 視聴覚障害者関連4団体連絡会（新谷）
- 10月16日 障害者放送協議会著作権委員会（川井）
- 10月20日 JDF 差別禁止法小委員会（新谷）
- 10月22日 高松市第5回口頭弁論、報告集会（湯浅）
- 10月23日 JDF 企画委員会（佐野）
- 10月25日～27日 第20回全国難聴者福祉大会 in 三重
- 10月27日 総務省面談・全難聴事務所にて（新谷、小川部長）
- 10月30日 コンビニエンスストアに関する良かった事調査委員会（小川部長）

⇧ 事務局報告

- 10月6日 耳マークアンケート〆切日
- 10月8日 要約筆記者全国統一試験説明会（東京オリンピックセンター）
- 10月15日 理事長、事務局長会議（全難聴事務所）
- 10月16日 視聴覚関連4団体連絡会（記録担当）
- 10月25日～26日 第20回全国難聴者福祉大会 in 三重（事務局ブース）
- 10月27日 第17回障害者政策委員会傍聴
- 10月31日 全難聴だより No. 77 発行
《予定》
- 11月4日 丸紅基金贈呈式
- 11月5日 JDF 代表者会議
- 11月8日 第16回関東ブロック女性一泊研修会
- 11月15日 第5回全難聴理事会（東京）
- 11月17日 JDF 幹事会
- 11月29日 要約筆記者倫理綱領シンポジウム
- 11月28日 全難聴だより No. 78 発行予定

「冬芽を想う」データベース登録

国会図書館に納本した「冬芽を想う」は、書籍番号がデータベースに登録されましたので、全国の図書館、文書資料提供施設で取り扱いができるようになりました。

各地の図書館から問い合わせがあり、蔵書としての購入につながっています。

多くの方にお読みいただき、難聴者・中途失聴者やその支援者の情報を知っていただけるようになればと思います。



冬芽を想う：難聴者とその支援者による体験談集

全日本難聴者中途失聴者団体連合会

詳細情報

書誌作成中: 国立国会図書館での利用可否はNDL-OPACでご確認ください。

タイトル: 冬芽を想う: 難聴者とその支援者による体験談集

著者標目: 全日本難聴者中途失聴者団体連合会

出版地(国名コード): JP

出版地: 東京

出版社: 全日本難聴者・中途失聴者団体連合会

出版年: 2014

大きさ、容量等: 242p ; 19cm

ISBN: 9784990780401

価格: 1200円

出版年月日等: 2014.7

対象利用者: 一般

資料の種類別: 図書